**「御霊に属する人、肉に属する人　」**　丸屋信也著　いのちのことば社　まとめ

☆２律法的な信仰(肉に属する人)から健全な信仰(御霊に属する人)へ成長するにはどうしたらよいか。の続きです。

**４年齢相応の成長をする**　＊「完全におとなになって」エペソ4：13とは「その年齢にふさわしいおとな」の意味。

＊私たちは確実に成長するはずの霊のいのちをいただいているので、信仰をもって年月を重ねることで、それ相応の

　成長をする。子どもは健康であれば、必ず成長するように、私たちも堕落して失われていた霊のいのちを､キリストによって再びいただいている。そのいのちが御霊に属しているならば必ず成長していくのです。もし、するはずの成長ができないで､いつまでも同じところをぐるぐると回っているならば､肉に属しているということになるのです。

＊完全な大人になっていくというのは、「私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し」とあるように一致に向かって行くこと。神の素晴らしさを体験し、深い御旨を知っていくプロセスの中で、それをお互いに分かち合い、共有し、お互いから学び、さらに深い一致へと進んで行く。イエスキリストはご自身のいのちを

通して、神と人との隔たり、人間同士間の敵意を取り除いて平和をもたらして下さったのですから､私たちも､家族、夫婦、教会の中で様々な立場や考え方の違いはあっても、その複雑さを越えて一致していくことができるのです。

自分の確信にのみ固執する姿は、キリストにある幼子の状態。神の恵みの中で、受け入れられている安心感の中で、成長し続けて行きましょう。これが御霊に属する人なのです。

**☆３御霊によって歩む、みことばに固く立つとは、実際にどのようにすることでしょう。**

**Ⅲ　信じていることは外に出る**

頭で理解し、心で信じている福音的な信仰を、生活にどう適用するか､その信仰が、外にどう現われているかが、

非常に大事。**ex6**熱心な信仰を持つ模範的なクリスチャン: 家では祈りとみ言葉に時間を取り、教会では熱心に奉仕し、中心的な存在。そのため、家族との時間があまり取れなかったが、子どもは親の信仰を見て育つと思っていた。親の祈りが応えられ、子どもが献身し、周りのクリスチャンにも「さすが」と思われるが、その子が神学生の時に、入院するほどの重い鬱になった。その原因は、その子が持っている神さまのイメージが､いつも後ろを向いて自分に

背中を向けている神さまだった。最初は本人もそのような否定的なイメージを持っていることに気づいていなかったが、ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞを重ねていくうちに神さまについて「偉大な方であるけれども、わたしに個人的に関心を寄せて

下さるとは思えない。愛してくださっているのだろうとは思うが、いつも後ろ姿しか見せて下さらない」という

イメージを持っていたことがわかった。これは、その父親や周囲の人々が霊的だと思っていた態度が、実はそうではなく、その影響が子どもに出てしまった例。

**１キリストの身たけ**「キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」エペソ4：13

＊神さまがどんなに愛に満ちた方であり、どんな思いをもって自分に、また世界に関わって下さっているのか、何をなそうとしておられるのかということを、聖書を通して深く知っていく中で、自分自身の課題に直面し、その解決をイエスさまに求めていく。その歩みの中で成長していき、キリストの満ち満ちた身たけにまで達する。

＊人と人とのコミュニケーションは、言葉によるものはたったの７％、後の９３％は、非言語的コミュニケーション

(態度、表情、声の調子)、すべて含めて相手に何かを伝えている。言葉で何かを言っても言葉以外のもので、その言葉を否定することは簡単にできる。神さまは愛の方ですと言っても、現れてくる行動や表情がその言葉と一致

しなければ、キリストの身丈にまで達しているとは言えない。

**２自分の内面と向き合う**　＊肉体の病気を、なすべき手当をしないで放っておけば悪化してしまうように、自分の

問題を神の光に照らし出されて直視していく必要がある。どんな部分に弱さや足りなさがあるのかを示されていくことが大切。自分自身の見たくない部分を見るつらい作業も、すべて神に受け入れられているという安心感の中で

行っていくことが鍵。

**３愛をもって語る**ことの大切さ「愛をもって真理を語り、」エペ4：15 **ex7**癌の告知：お医者さんが、何の配慮も

なく、同情も示さず、冷たく事務的に「癌ですね。しかもかなり進んでます」といったら、病気のことを受け止める以前に、精神的なショックが大きすぎてうちのめされてしまう。 ＊愛のない真理は冷たく厳しすぎて受け止められない。反対に真理のない愛はただ甘やかすことになる。 ＊相手の話に耳を傾け、相手が尊重されていると感じられるように語る。これは、イエスさまが罪人にとった態度。ｃｆパリサイ人･律法学者は、罪人を、見下し裁いた。

＊語る者と聞く者の両者に祝福をもたらす語り方。イエスさまは罪を指摘するとき、それを認めて悔い改めるなら

赦されて神の愛が注がれるという事実も一緒に提供した。傷やダメージを与えてしまう真理の語り方は、愛をもって真理を語ることにはならない。＊語る側も自分も同じように、共に主の愛に赦されているという立場に立って

語る。＊問題そのものに絞って、真に悔い改め、改善できるように語る。人格や霊性にまで広げない。

＊相手に真意が伝わるように、気をつけながら愛をもって真理を語る。

**４組み合わされ、結び合わされるために**　エペソ4：16 ＊各自が自分の役割を果たし、自分の働きが他者のサポートを必要としていることを忘れない。一人でやっているように思いがちだが、陰で祈って下さる方々がいる。

＊**ex7**ご高齢の方の例：「先生、お忙しいのにわざわざ私のところに来ていただいて申し訳ありません。私はもう教会の奉仕は何もできません。お荷物になってしまいました。だから先生、もういいから」「何がお荷物なんですか。

あなたは教会のために、私のため、世界のため、日本のために祈って下さっている。これほど大きな働きはありませんよ。だから教会が守られ、祝されているのです。この祈りの奉仕は寝たきりでもなんでも続けられるじゃないですか。」　＊教会はこのような隠れた祈りによって支えられ、実を結ばせられるもの。＊このような見えない役割も、神の目にはちゃんと見えている。＊人と人とが組み合わされるためには､お互いの自己中心性が削り取られる。人がもし一人でいれば､自分の自己中心性に気づくこともなく､人間関係の中で痛みを味わうこともなく､成長も

していかない。＊かしらなるキリストを共有し、赦すところは赦し、告白するところは告白し、痛んでいるところには癒しがもたらされるように祈る。＊教会に強い人しかいなければ、愛は育たない。表面的な交わりではなく､

自分の弱さを打ち明け､お互いの重荷を負い合う交わりの中に愛が育っていく。＊弱さを覚えている人は、その領域での弱さを感じていない人に､弱さとは何かということを分かち合う助けになり得ます。＊自分の弱さを話すと

裁かれたり､ダメなクリスチャンだと思われるので話せないという人もいる。交わりの中では、相手に完全を求めず､それぞれができる範囲内のことをやることで満足し､相手にNOを言う権利を保障していくことが大切。

愛をもって真理を語るすべを身につけ、語る人も語られる人も祝福されていく。これは、主が成して下さる業。

**Ⅳ　成長とは継続である**

＊何かを学んだ時に、その時点で、それがもう身に着いたかのような錯覚をすることは危険。

＊学ぶことと、成長することは別…成長するために、学びは必要不可欠だが、聞いたことがすでに身についたのでは

ない。教えられたことと成長そのものを混同してしまうと、何か問題を抱えた時に、教えられた信仰の確信によって対応しようとして祈るが、確信したような結果が出てこないときに、「やっぱり駄目だったみたい」という失望感が心の深いところに生まれてしまい、現実はこんなものかな、自分はこの程度かな、というあきらめの気持ちが

わいてきて、御霊に従っていくことを妨げ、肉に属する人になるきっかけとなる。アブラハムも神さまから直接

約束をいただいていたが、２０数年もの間、その結果を見ることができなかった。その中で、様々な試練に会い、失敗もしたが、そのプロセスを経て、彼は信仰の父と呼ばれるまでに成長した。

**１継続することの大切さ**＊**信仰を線でとらえる**と、何か問題が起こった時に、教えられた信仰で対応するが、失敗

　しても、そこから学び、修正していく。何が原因なのか、神さまの御心はどこにあるのかと求めて行き、神さまの

　取り扱いを受けることができ、神様と深く交わることができる機会になることを体験し､それが習慣化していく中で、主との交わりがますます深められ､御心がなんであるかをわきまえ知ることがより可能になっていく。上手くいった、いかなかったと一喜一憂することはなくなり、信仰生活がどんどん豊かになっていく。これが成長の姿。

＊**信仰を点でとらえる**人は、悔い改めているようでいて実は後悔しているだけ。自分はダメだと感じているが、

何がダメだったかということを追求しない。本当はうまくいかなかったなら､それなりの理由があったはず。それは実は､神の深い御旨を悟るチャンスであるのに､やっぱり自分はダメだと言って､新しい基準を作り、目標達成に邁進していく信仰では､自分の心や魂の深いところを主に取り扱っていただかずに終わってしまう。もったいないこと。

＊祈りというのは、神と人とが人格的に応答し合うもので、願ったことが単に叶えられた、叶えられないというもの

　ではなく､祈りを通して神との人格的な交わりをしていく過程で、私たちは心を探られ取り扱われ、キリストのみ姿

　に似る者へと変えられていく。大事なことは、神さまとのやりとりを継続し、その中で成長していくこと。

次に、**みことばを点でとらえるのと、線でとらえるのではどのような違いが生じてくる**でしょう。例えば、

「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」エペソ4：26のみ言で、

２**みことばを点でとらえる**と、「怒らない」ということが目標になる。このみ言葉を守れるようになっていくプロセスよりも、怒るか怒らないかということだけが問題になり、怒ったら失敗、怒らなかったら良いと考える。こういう考え方でやっていくとしばらくの間は、怒らずに過ごすことができるかもしれない。イライラする場面になると

主に祈り、ゆだね、それで怒らないですんで、主は助けてくださったと感謝し、しばらくして、また何かあると

祈り、助けられたとホッとする。それを何度も繰り返していく中で、一層複雑な問題に直面した時に、今まで出て来ては押さえ、出て来ては押さえてきた、怒りの感情が一気に大爆発してしまう。そうなると、非常な自己嫌悪に

襲われながら、悔い改める。二度とあんなことはしたくないと思い、祈りやっていくが、また同じことを繰り返してしまう。これは実は「神さまにゆだねる」と言いながら、自分の力で自分の決めた基準を守ろうと頑張っているにすぎない。 自分の意識としては神にゆだねているので、自分が頑張っていることもなかなか気づかない。そして振り返ってみると何年経っても少しも霊的に成長していないという結果に終わる。このやり方の問題は、みことばに立つか立たないかということを、怒るか怒らないかという問題にすり替えてしまい､自分で決めた基準を守れるか守れないかに焦点を当てている。神さまの力に頼って､怒るか怒らないか､ゼロか百かという捉え方をしていることです。この人が、神の力に守られて、数か月間怒らないで過ごす間に、怒りを爆発させている他のクリスチャンを見た時、あの人はダメだ。みことばを守れていないと心の中で思うのではないでしょうか。これは**肉に属する人の律法的信仰**です。

３**みことばを線でとらえると、**怒らないことが目標ではなく、このみ言葉に込められている神さまの御心にかなう

ようになることを目標にできる。このみ言葉の真意は怒らないことではなく、怒っても罪を犯さないことです。

怒りを感じた時に、二つのことを考えてください。この感情は罪に対して湧いてきた怒りなのか、自己中心性が現れたものなのか。もしその怒りが、後者であれば、そのことを自分で意識してコントロールしなければならない。次は怒らないようにしようではなく、今回､何が自分をそうさせたのかということを、神さまの前で取り扱っていただく。そうすると、今まで意識したことはなかったが、実は自分はこういう不満を抱いていた、このところ無理をしすぎて疲れやイライラがたまっていた、ということがわかってくるので、これから、自分が何を改善しなければならないのかがわかってくる。怒りを覚えるやいなや問答無用で抑圧して、結果的にため込むのではなく、それを適切に吟味し、今回何が自分をそうさせたのかを、神さまの前で取り扱っていただく。そのプロセスがわたしたちを成長へ導いてくれる。＊誕生(救い)は一瞬だが、成長(聖化)は継続していくものです。

**４成長とは能動的なもの**

＊「怒っても、罪を犯してはなりません。」という**み言葉に立つ**とは「怒らなくなるようにして下さい」と祈って

信じて待つという受動的な行為ではなく、そのみ言葉の中に示されている主のみ心にかなった自分になるために、自分の内面を探りつつ、明らかになった弱さや罪を聖霊に取り扱っていただくプロセスだということ。このように

自分の心を絶えず御霊の支配の中に置きながら一歩一歩と歩んで行くうちに、神の御心にかなう完全な大人になっていくのです。毎日の生活の中で､次から次へといろんなことが示されてくる時に、これが今の私の課題だとわかり、取り扱っていただくということを積み重ねながら、私たちの全領域が御霊の支配の中に少しづつ移されていくことこそ、成長のプロセス。一歩一歩は小さいかもしれないが、その生活を１年続ければ、振り返ってみると確実に

１年分成長しているはずです。その歩みの中ではもちろん、たくさん失敗もするでしょうが、その失敗は､私たちのすでに赦されている足りない部分なので、安心してその課題に取り組めばよいのです。

＊今の時代は、自己中心、物質主義、快楽主義で、これからも改善するよりむしろ悪化して行く。その社会に生きる

　クリスチャンの責任は「地の塩」「世の光」となることだが、肉に属したままでいるなら、その責任を果たすことは

　とても困難です。自分で決めた基準を守ろうとしたり、自分にも他人にも不満がある、肉に属する信仰で歩んで

　いくと､とてもつらくなってきます。私たちに与えられている神の恵みを、日々味わいながら、感謝しつつ成長して

　いく御霊に属する人の信仰で歩み、福音に生かされてまいりましょう。

以上が、「御霊に属する人、肉に属する人」のまとめとなります。新型コロナウィルスが猛威を振るい、不安や恐れや怒りや悲しみ等、私たちは日々感じておりますが、そんな中でも、私たちを、いのちを捨てて愛し、赦して下さり、今も生きて働かれるイエスさまに感謝し、祈りの中で、すべてをお任せし、共に歩んでいきましょう。

「　わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。それで、わたしたちは心強い。

そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。そういうわけだから、肉体を宿と

しているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。　」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Ⅱコリント５：７～９

★新型コロナウィルスが世界中に広がっているが、聖書的にはどう考えたらよいか。

ハーベストタイム　Ｑ&Ａより　まとめ

Ａ-１　疫病の存在は、被造物世界が堕落した状態にあることを示している。

　世界規模の疫病の被害は､歴史の転換点でたびたび起こっている。古代世界では天然痘､中世から近代にかけては

ぺスト､19世紀はコレラの蔓延､第1次世界大戦時にはスペイン風邪と言われたインフルエンザで多くの命が失われた。最近の疫病の広がりは、グローバル化に関連している。疫病との戦いは、被造物世界が完全な状態に回復されるまで

続く。私たちは心する必要がある。

Ａ-２　神が疫病を通して何かを語っておられる。霊的メッセージを示している場合がある。

　①出エジプト記の十の災いでは、パロ王に語り、イスラエルの民をエジプトから去らせるため。

　②カナン定住後のイスラエルの民に降った疫病では、民を悔い改めに導くため。

　③イエスさまは、町々村々をめぐり、すべての病をいやされた。これはイエスが救い主であることを証明する

ためのしるしであった。全部が全部とは言えないので、慎重に判断する必要はある。

Ａ-３　疫病は患難時代の予表と見ることができる。

　　イエスさまが、週末のことを語っている(ルカ21：11)「また大地震があり、あちこちに疫病やききんが起り、

いろいろ恐ろしいことや天からの物すごい前兆があるであろう。」

　　さらに黙示録では7つの鉢の裁き(16：1)「それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむかい、「さあ

行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ」と言うのを聞いた。」と、最悪の災害の預言が成されています。

今の疫病から学ぶ教訓は、今後、今よりもはるかに苛酷な疫病、災害が起こってくるということです。

あなたは、それに対して、備えはできていますか。その備えとは、イエスキリストを、救い主として信じること。

それが、最高の備えです。なぜなら､イエスキリストを信じる者は､やがて起ころうとする患難の裁きから

守られるという約束が与えられているからです。